

書道研究誌

# 書の光

3  
2025



Vol.679  
宮城野書道会



漢詩を味わう

第188回



宣城見杜鵑花 李白

蜀國會聞子規鳥 蜀國會て聞く子規の鳥

宣城還見杜鵑花 宣城還た見る杜鵑の花

一叫一迴腸一斷 一叫一迴腸一斷

三春三月憶三巴 三春三月三巴を憶ふ

蜀の国では子規の声を聞いたものだ。

ここ宣城ではまた杜鵑の花が見られる。

ホトトギスが、ひと叫び、ひと廻りするたびに、腸も哀しみにひとたび断たれる。

そして春の三月、故郷の三巴が懐かしく思い出される。

《宣城》現在の安徽省宣城県。

《子規》ホトトギス。

《杜鵑花》和名はさつきつじ。一名を映山紅とも言われる。

《蜀国》現在の四川省。李白の故郷。

《三春三月》はじめの三に意味はなく、語呂合わせに用いる。

李白は二十四歳で蜀を出て、四十過ぎに玄宗に仕えて長安にいたものの、その前後の期間は放浪の旅に明け暮れて、故郷に帰ることはありませんでした。この詩は現在の安徽省宣城で詠んだ五十五歳の詩です。宣城の杜鵑(ホトトギス)の花をみて、故郷の春の盛りを思い起こしています。

宣城には敬亭山という有名な詩跡があり、李白は「独り敬亭山に題す」という有名な詩を残しています。また李白の敬愛する南朝齊の詩人謝朓ゆかりの地です。謝朓は太守として在任した二年余りに多くの詩を書いていきます。

ホトトギスは中国では長江地帯に多く生息する鳥といわれ、盛唐時代ころから頻繁に詩の題材として詠まれるようになりました。杜甫や杜牧もホトトギスの詩を詠んでいます。

ホトトギスにはさまざまな逸話があり、有名なものを紹介します。周代末期の蜀の国王だった杜宇は望帝と号していましたが、治水の功績があった宰相に王位を禅譲しました。のちに復位を望みましたが叶わず、恨みを抱えて亡くなりました。その魂が化してホトトギスとなったということです。ホトトギスの口の中が赤いのは、血を吐きながら鳴きつづけたためと言われます。ホトトギスはこのことから「杜宇」と表記され、このほか「子規」「杜鵑」なども書かれ多くの異名を持つ鳥です。またホトトギスの啼き声が「不如歸去」(ふじよききよ、プルーグイチュ、du ju goe)、「帰った方がいいよ」と旅人には故郷に帰りなさいと聞こえることから、「不如歸」とも表記されます。

杜鵑花はつじの一種で、山地に自生してホトトギスが鳴くころ満開になります。ホトトギスの吐く血で染められたように紅く、映山紅とも呼ばれます。

詩の最後に出てくる三巴は巴郡・巴西・巴東の総称で四川省東半分を指しますが、ここでは蜀国の言い換えで、前段の「一叫一迴腸一斷」に呼応するように詩を構成しています。

参考文献・巨大なる野放図「李白」(平凡社)・世界古典文学全集「李白」

(筑摩書房)・漢詩の事典(大修館書店)



郷語忽ち驚き聞く 相看れば是故人なり 龍庭二十載 故園の春を識らず

郷語忽ち驚き聞く  
相看れば是故人なり  
龍庭二十載  
不識故園春

《大意》急に故郷の言葉聞いて驚き、よく見てみると昔なじみである。匈奴の王庭(朝廷)に二十年もいたので、すっかり故郷の春を忘れていた。  
(戴梓詩・逢子先上人)

春情柳色に寄せ 鳥語梅中に出ず

春情寄柳色 春情寄柳色  
鳥語出梅中 鳥語出梅中

《大意》春のおもいは柳の色に寄せ、鳥のさえずりが梅の花の中から聞こえてくる。(間人舊詩句)

子相  
生家  
公

読み

子は公相の家に生まれ（あなたは高位をきわめた家柄の人）

佐藤象雲書

第二画は軽く入筆して○印の位置から自然に湾曲させる

「目」上辺は偏第一画横画の延長線上に

撥ね出しが字の中心に

下がらぬよう

横画の間隔が間延びしないよう

第五画以下の各線は中央の○部分に収束させる  
特に右払い起筆位置が下がらないよう

「ハ」左右バランスよく相対させる  
「ム」強い線で

末広がり

一般部規定課題出品について

- ・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
- ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
- ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

蘇軾詩

「呂行甫司門の河陽に

倅となるを送る」

(前半)

結交不在久

交を結ぶこと 久しきに在ざるも

傾蓋如平生

蓋を傾ぐるること 平生の如し

識子今幾日

子を識りて 今幾日ぞ

送別亦有情

別れ送りて 亦た情有り

子生公相家

子は公相の家に生まれ

高義久崢嶸

高義 久く崢嶸たり

天才既超詣

天才 既に超詣

世故亦屢更

世故も亦た屢しば更たり

譬如追風驥

譬えば風を追う驥の如し

豈免羈與纓

豈に羈と纓を免れんや

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

子生公  
相家  
お家  
子生公

次号課題

隷書

子生公  
相家  
高義久  
崢嶸

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部	順位	氏名
三月や		
萬々たる萱の山		

芥川龍之介

和泉溪石先生書

閏餘成歳律呂調陽  
 閏餘成歳律呂調陽  
 閏餘成歳律呂調陽

佐藤象雲書

音

ジュンヨセイサイ  
リツリヨチヨウヨウ

略解

四年毎に閏年があり一年の日数が定まった。音律を気節に配して天地間の陽気を整えた。



患卑者楚患

患卑者楚患

患あり、卑しき者は楚み悪い……

■石門頌せきもんしょう

(後漢・西暦一四八年)の臨書 (18)

象雲臨

『患卑者楚患』

石門頌は飄々とした隸書というのが多  
くの方の第一印象だと思えます。結体  
については漢隸として八分隸としての規  
矩に沿って一字一字の重心と均衡は失  
つてなく、分間が整い線の細さのなか  
にも健勁さがあります。褒斜の溪谷に  
ある巖壁に刻した摩崖碑でありなが  
ら荒々しくはありません。一般的に漢  
隸は線に重厚感を持つものが多く見  
受けられますが、石門頌が均斉のなか  
にも飄逸感や素朴さを感じるの  
はこの線質に因るものと思いま  
す。

今月の五文字は非常に整って安定  
感と全体の統一感があります。そし  
てすべての字の波磔が暢びやかで文  
字の拡がりや収まりを演出し、これ  
に呼応するかのよう「卑・者・楚」  
に見られる左払いがバランスを取  
り、「患・患」の心の上に載る部位が  
扁平に書かれて横への拡がりア  
シストしています。

誠重勞輕

誠重ければ勞軽く……

誠重  
勞輕

■王羲之・集字聖教序(唐・西曆六七二年)の臨書 (32)

象雲臨

『誠重勞輕』

今月の一節は、玄奘が危険を冒して遠く西域まで仏法を求めて旅したことを述べている部分です。「まごころが篤ければ勞苦も気にならず」と玄奘が十七年の歳月をかけて正しい教えをたずね求めた旅路だったことを言っています。

「誠」の歯切れ良い筆遣いに対して「重」は粘り強く、「勞」のゆったりとした線に対して「輕」は軽めの線です。このようなところが、文字間の氣脈が無い集字碑の最大の特徴ですが、この不調和こそがこの碑の魅力です。言い換えれば臨書する私たちにどのように氣脈をもちいて、纏まりをとともに変化を加味するかという裁量が委ねられている訳です。

一方で一字一字は王羲之の結体法が生きていて、「重・勞」は頭部(上部)を大きくし、「誠・輕」は偏旁の広狭や懷の取り方など王羲之の書美を感じることができます。